

# 『重井筒』の試行と特質

——葛藤のありか——

金 田 文 雄

『重井筒』は、その初演の時期が定かではない。『義太夫年表・近世篇』では、宝永四（一七〇七）年の十一月頃かとし、同年五月の『五十年忌歌念仏』の後に位置づけていゝる。広末保氏は、この作品を『堀川波鼓』をばさんで、『心中二枚絵草紙』、『卯月の紅葉』、『卯月の潤色』などととも、近松世話悲劇の「状況の複雑化」という過程における過渡的な作品として位置づけた。<sup>(1)</sup> たしかに後年の『心中天網鳥』等と比較するとき、そうした位置づけのあり方もたしかにもつともであるとはいえよう。一方、井口洋氏は、そうした側面を肯定しつつも、『重井筒』の独自性にも目を向け、とりわけお辰の造形に着目し、次のように結論づけている。

『心中重井筒』とは実は、夫とその恋人との心中を媒

介として、即時的に妻であったところから、その妻であることを対自化して相対的に見るところに出た、そのような妻の劇なのでもあった。お房と徳兵衛の心中は、その二人と対比してもより根元的な、真の転換を経験したお辰の「思ひや」という光によつて包まれてはじめて、救済を約束される「心中」になることができる。<sup>(2)</sup>

本稿では、これらの画面から考察していくことにするが、その際に特にこの作品の趣向についても注目していきたいと思う。

『重井筒』もやはりモデルとなる事件が存在したのであるが、その実説については不明である上に、初演の時期もまた定かではない。仮に『義太夫年表』の宝永四年十一月説を採るとしても、近松がこの作品を執筆するにあたって、およそどの程度の準備期間を持っていたのかもよくわから

ない。しかし、多分に印象的に語るのを承知の上で言えば、この作品は比較的短時日の内に書き上げられたものではないだろうか。重友毅氏は「ようやくこの種の題材にも筆が熟した<sup>(3)</sup>」と評しているが、たしかに詞章の運びは全体に極めてなめらかである。しかも、作品を「読む」よりも音曲に合わせて「聴く」方がより一層この感は強いであろう。

道行の韻律性は当然であるとしても、他にも例えば上巻冒頭に置かれた染め物による「物尽し」、また中巻の「ひ」尽しなど、多分に言葉遊び的な要素が強く、したがって同時にこのことが詞章のなめらかな運びとなつて機能しているのである。また、中巻には表現の上で俳諧風の趣向も見られるが、まさしくこうした俳諧的な「軽み」といったものが、劇作品全体のいわばリズムを構成する基調となつているのである。

そして同時にこうした「軽み」はまた、言葉の連想の流れの上だけではなく、人物像の設定や物語展開にまで及んでいる。そしてそのことは、とりわけ本篇の主人公である徳兵衛の描写に於いて顕著に見られるのである。たとえば、中巻で徳兵衛が登場し、これを重井筒屋の兄夫婦が引き留めようとするくだりで、彼は「生姜酒」、「生姜茶」、「生姜炬燵」のような軽口で応酬する。ここはまさしく徳兵衛に

とつては抜き差しならない場面であるにも関わらずである。また、これに続くいわゆる「炬燵責め」の場面に於いてさえも、その軽口は止むことがない。「此の冬からいづかたも火の強い炬燵廢物。北脇辺のよい衆は大方炬燵に水を入れるげにござる」といった具合にである。この時、房は「涙の埋火に焼付けらるる身の苦しみ。ふとんのかげより手を出し裾に取りつき堪へんとするに堪へがたき地獄もかくや」というような状態にあつたにもかかわらずである。もっとも、表面の軽口の裏では「炬燵よりも身をこがす」徳兵衛ではあつたのだが。すなわち、この場面に限らず、本篇全体にわたつて、深刻さの裏側に常にある種の「滑稽さ」が同居しているのである。

その極めつけは心中死の場面であろう。房を刃にかけた後、死に遅れた徳兵衛は埋れ井戸に落ちて死んでしまう。たしかに悲惨さはあるものの、やはりここでも滑稽な感はない。

また徳兵衛以外にも、下男の三太郎は一貫して道化役を演じているし、隠居の宗徳にしてもまた「隠居の親仁がわせると。家内は凍み郡山染めに成るわいの」と紹介され、その登場に於いても「尖り声にて」現れたにもかかわらず、その説教の様は、これまた滑稽なものとして描かれており、

それは例えば以下の如くである。

おれらが談義参して一文投げる賽銭さへ。進ぜうか進ぜまいかと。畳算置いて見て。たとへ算が合うても五度に三度は投げずに仕廻ふ。傍にゐる同行衆がぐわらぐわら投げるときには。銭を一文つまんで肩へ手をかう振上げ。投げる顔で塩の長二郎は手に止まった。かう機転をきかせねば過ぎにくい身代。

ちなみに、ここでの畳算の趣向は太宰治の『新釈諸国咄』中の「粹人」に見られ、それはあるいはここから取り入れたものかもしれない。

そして宗徳は、挙げ句には孫の小市郎を徳兵衛と見間違えたままに帰ってしまうのである。同じように「尖り声」にて登場する『心中天の網島』の五左衛門と基本的な役どころは似ているものの、彼が中巻で無理矢理におさんを連れ去ることで、劇に決定的な転換点を与えるのは大きな違いを見せている。もともと、『心中天の網島』においては、この時もはや劇自体が進退極まった状態に陥っており、そこに第三者による決定的な打開をこそ必要としていたのに対して、ここではそうした必要がなかったということもあるだろう。

本篇に於いて劇の進行を司っているのは徳兵衛にほかな

らない。しかも、それは徹頭徹尾徳兵衛ひとりにかかっているときえいえるのである。近松世話浄瑠璃としての処女作たる『曾根崎心中』においてさえ、徳兵衛、お初の両者の双方にそれぞれの決意があり、心中に至っていたにもかかわらずである。本篇が、劇的緊張という観点からすれば、明らかに弱いものとなったのは、ここにその原因の一端があるのだろう。

まず、上の巻に於いては、お辰は何ら積極的、主体的な行為を為しえなかった。すなわち、徳兵衛の「銀まで見せての誓文」に納得し、生姜酒を用意して彼の帰りを待つといった極めて消極的、受動的な態度にとどまらざるを得なかったのである。

一方、ここでの徳兵衛は、一角で頼んだ人置の女を使つてまでお辰の印判を盗用し、房に金を用立てようとするのである。<sup>(4)</sup>もともと、上巻の最後では、これも返さざるを得なくなり、したがって、この行為もまた、次なる葛藤を生み出していくというようには機能しなかったのではあるが、むしろ、単純にもとの状態に戻り、再び房の進退が窮まるという状況に回帰したにすぎなかったのである。そして、この点では「生姜酒」と「玉子酒」の選択に逡巡した揚げ句に「玉子酒」へと引き寄せられていく徳兵衛の姿は、た

しかに『冥途の飛脚』に重なるといえるだろう。しかし、忠兵衛が大事の金を持ったまま梅川の所へ行き、ついにはそこで封印を切ってしまうという決定的な行為につながっていくのとは対照的に（そして、『冥途の飛脚』がそのことによつて、まさしく劇の緊張を著しく高めていったのに比すれば）、ここでの徳兵衛は既に決定している死へと傾斜していくにとどまるのである。

なお、劇全体が一人の男性の行為によつて展開していくという手法は『冥途の飛脚』に引き継がれていくのであるが、今も述べたように、緊張の高まりとその持続といった点において、本篇はその手法を十分に生かしきれなかったといえるかも知れない。

## 二

ここで、徳兵衛、お辰、お房がそれぞれに抱えている葛藤について整理しておきたい。

まず、徳兵衛であるが、彼には妻子がありながらも、遊女お房とわりない仲となつており、ほとんど家にいることもない。そして、こうした状況がもう随分と続いているのである。もつとも、劇が始まった上之巻ではそのお房とも「挨拶切った」ということにはなつていないもの、それも

また所詮は重大な拘束力を持つていたわけではない。

たしかに本篇が初めて妻子ある男と遊女との恋の顛末を描いたとはいふものの、後の『心中天の綱島』に比べると、男はそのこと故に葛藤を抱えねばならないというほどにはなつていない。それは一つには、徳兵衛が紺屋の入り婿であり、また一子小市郎も、お辰のいわゆる連れ子であるといった設定が、彼にかなりな程度の自由さを保障していたということがあつたろう。また、先にも述べたように徳兵衛は妻子とお房という本来両立するはずのない中に立つていながらも、それが十分な葛藤にまで高まつていくことはない。すなわち、徳兵衛がそもそも二者択一を迫られる状況にはなく、初めからお房に大きく傾斜してしまつていたからにはかならない。したがつて、こうした設定から状況はまったく動きようもなかつたのである。

そして、ここに出来たのが、中之巻で明かされるように、お房が今夜中に京の親元へ送らなければならぬ金の問題であつた。すなわち、劇はこの時、「今夜中」という刻限を区切るのである。そして、このことこそが徳兵衛にとつての葛藤を生み出すのに他ならない。まさしく上之巻で、劇は当然の要求として、徳兵衛にこの金の工面を強いることになり、ここに新たな劇進行のモチーフを得るの

である。

そして、徳兵衛は一旦は口入れの女を雇つての「騙り」をもつてしてまで丁銀四百目の金を手に入れる。しかし、それにもかかわらず、お辰に口説かれた徳兵衛は上巻の終わりには、いともあつさりとの金を返してしまふのである。それは徳兵衛の語る「我一人思切ればそなた子供隠居のため。兄貴の身上我が身のため房めが後の為にもよい」という言葉がまさしく正論であつたからに他ならなかつたからである。

この時、徳兵衛は「今までもそなたに恥ぢ。止めう／＼と思ひしが是程の瀬戸がなうてうか／＼と尽した」とも語るが、ここでも本篇が強い劇的緊張の高まりを持ちえなかつたのは、この場面がここで言う「是程の瀬戸」になりえていなかつたからであろう。そして、そもそも徳兵衛がお房と「挨拶切つた」というその事情が空転していたことも、またこのことと関わりがあるだろう。さらには、この時お辰の前では「ふつつと思切つたぞ」と銀を返しておきながら、そのすぐ後、一人になつた途端に「房が大事をはつたりと忘れたり」と気づくなど徳兵衛は、その場その場だけで動いてゆく、いわば多分に軽薄な存在としても描かれていたのである。つまり彼には深く思い詰めるという

ところがないのである。

このことはまた、上巻では密夫との勘違いから、「入婿のことなれば家屋敷家財にも。芥子ほどにも疵は付けまいがうぬが命に疵付ける」との嫉妬心をお辰に向け、また中巻では「ア、大幣の此の蒲団。小六も寝つる小夜も寝つらん。房も寝よう引手あまたにどこの誰めと寝くさつた。打ちたい踏みたい叩きたい」と今度は房に嫉妬を向けているのである。もともとお房に大きく気持ち傾いていたといへ、上の巻でのお辰への嫉妬もまた本当であろう。そうしてみれば、徳兵衛はお辰に対しては経済的にも、また精神的にも十全に依存しながら、いわばその安心感の中でお房のもとへ通つていたということになるだろう。そして、このよくな徳兵衛の自立性の欠如はまた、心中死の場面でも伺えるのである。

なう世間を聞けば女先立ち男は跡に死損ひ。見苦しき沙汰にあふ無念の上の死恥ぞや。

このような形で徳兵衛はまた、お房に対しても依存心を棄てきれなかつたのである。したがつて徳兵衛の心中の決意もまた「兄貴までが知られたり」と、自らの意志の中で内発的な形で生まれてくるというよりも、外からの圧力によつて促されているのに過ぎなかつたのである。彼が浄土

から法華へと宗旨替えるのも、お房のためというよりは、自身の来世がおそろしく、あくまでもお房にすがろうとする気持ちの現れにはかならない。もつとも、こうした徳兵衛のあり様は、まさしく、この時代の色男そのものであるのかもしれないが。

そして、こうした性行は「冥途の飛脚」の忠兵衛、あるいは『心中天の網鳥』の治兵衛などにも受け継がれていくのである。ただ、忠兵衛にしても治兵衛にしても、それぞれ梅川、あるいは小春への、より深い思い入れは持っていたとは言えるであろう。

### 三

次に女房のお辰であるが、彼女の抱えていた葛藤は「恥」の一語につきるであろう。連日家を留守にしている徳兵衛に対して、お辰は「法界の男ぢやと思へば済む」と恨みながらも、結局はその性行や現在の状況を許してしまっている。上の巻での徳兵衛への口説きの中で、お辰は次のように語る。

跡の月の騒動に一家が寺へ退いての時見廻に行て見届けた。余のお山衆は押退けて房一人を大事にかけ。

こゝらで心底見せ顔にけばくしい仕方ども。傍にあ

るは知った衆こなたより私が顔。阿呆らしう見えたや  
らまぶられて帰りしぞや。それにあまり踏付けた先に  
房を連れて来て。女どもの女房の印判までを引搜し。  
納戸戸棚も見せさらし是が嬉しからうか。男男の恥よ  
りも隠しても隠したい。女同士に恥を見せ男は寝取ら  
れ寝間帳台は見さがされ。

また、兄嫁に対する「兄嫁御のねすり言聞きづらや聞きにくや」も、これと同様の次元から発せられていたのであるうし、ひいては隠居の怒りから徳兵衛をかばうのもまた家の、あるいは自身の恥の感覚からであろう。

すなわち、お辰は家付きの女房として、紺屋の店と家とを文字通り一身に背負っていたのであって、一方の徳兵衛にはこの感覚はまったく欠如していたと言っているだろう。ところで、この「女同士の恥」であるが、これは後年の『心中天の網鳥』における「女同士の義理」に発展している素地を持っていたことは言うまでもない。ただ、後者が「女同士の義理」にかけて、おさん、小春のそれぞれが、片や「愛想づかし」、また片や「うばかままたきに」なつてでもと、互いに自己存在の根幹をかけてまで全うしようとする積極性——したがって、それは劇の中に行爲を生み出していくのであるが——を持っていたのに対して、この

「女居士の恥」は、そうした積極性を持たず、むしろ消極的、受動的なものに過ぎなかつたのである。

しかも、お辰の語る「女居士」は、個人的な領域にとどまっており、双方向性さえも持つてはいなかつた。それゆえに、この葛藤は、お辰の内にとどまり、劇を進行させて行くだけの力を持つてはいなかつたのである。そして、本篇がいれば徳兵衛の一人芝居となつていくのは、まさしくこの故にであつた。

また、お辰はたしかに「心一ぱい理をせめて情けも深く」と、理だけではなく、徳兵衛に対する情けも十分に持つていたであらう。しかし、宗徳に責められたときにも「天の悪性押し包み」「いつそいうてのけうか。いや／＼それも惨い事」と、これまた自身の内に押しとどめてしまつてゐる。すなわち、先にも述べた如く、こうしたあり様は、お辰は紺屋一家の実質上の主として、そして徳兵衛には夫でありながらもあたかも自身の放蕩息子に対する母であるかのように接してゐた。畢竟お辰には「生姜酒して待つ」以上の行為はできなかつたのである。このような半ば母親のような慈愛のあり方は、徳兵衛をして再び甘えへと向かわせてしまふのは、いわば必然であつた。そうして見方をするならば、徳兵衛を糸の切れた凧のようにしてしまつた

のはお辰であつたとも言えよう。

死に出た心中なれば疾くに命はもうない人。あさましや悲しやな女房のない人ならば。殺すまい死ぬまいものときぞや最期の悔言。お房が恨も思ひやる思へば我が有る故に。人二人殺すよな位牌に向うて言訊ない。

ここで、お辰もまた死のうとするのであるが、それは決して絶望からではなく、一方はお房に対する女房としての恥の感覚と、そしてもう一方には徳兵衛を不肖の息子にしてしまつた申し訳なさといつたものがあつたのではないだらうか。

上の巻で、この日も帰らぬ夫、徳兵衛に対してお辰は「法界の男ぢやと思へば済む」とひとりごちるが、まさしく徳兵衛はお辰にとつて「法界の男」にすぎない存在であつたといえるかも知れない。

#### 四

最後にお房であるが、彼女の抱える葛藤はある意味できわめて単純である。「私が京の父様由ない者の請に立ち。明日切に銀立てねば私をやる」との判」というのがそれであり、先述した如く、このことは同時に刻限を区切ることで劇の進行を促してもいたのである。ただし、中巻の冒頭、お房

と飛脚とのやりとりの中で飛脚が「いや最早来られませぬ」と言い捨てて帰ってしまった時点で、実はもはやお房の望みは絶たれてしまっていたとも言えるのである。したがって、ここで既にお房の抱える目前の葛藤は消滅してしまっていたのである。また、このことは同時に劇的時間の切迫性をも失ったことを意味するだろう。これに続く条で、お房が一度剃刀で死のうとするのは、この故にほかならなかったのである。

この時、お房もまた「身一つ胸を据えたればいっそ悲しい事もなし」とみずからを納得させようとしている。すなわち、この限りではお房は徳兵衛と一緒に死ななければならぬ必然性をもまた失っていた。もつとも、遊女の身ではあり、しかも進退窮まっていたこの時、お房に残された唯一の望みといえば徳兵衛と死ぬこと以外にはなかったであろうが。

ところで、重井筒屋の内儀はお房に次のように語る。

必ず妻子有る人と末の約束せぬ事ぞ。男の密夫同然にて思ひばか行かぬ物ぞとよ。徳兵衛様とも今は挨拶切つたと有る。オ、仕合くめでたいこと。お辰様を離別させ。添うてそなたの本望ならず。いとしい人の身のひし一門中の憎しみ受け。そなたを鬼よ蛇よとい

ふ。又囲はれて世を忍び後家同然に暮しても。是が何の手柄ぞや。

これはまさしく道理でありながら、その言葉に対してお房は「たゞあい／＼としゃくり泣くばかりで、この道理との間にせめぎ合いが生じてくることもない。したがって、ここから新たな苦悩が始まるというわけでもない。すなわち、この方向からも劇はもはや進行し得ないのである。したがって、炬燵の責め場が用意されねばならなかったのは、こうした観点からすれば当然であったとも言えるのである。

そして、お房の最後もまた「ぐつと突抜く一刀わつと叫びし一声の」と、いともあっけない。「曾根崎心中」のお初や、『心中天の網島』の小春が断末魔の苦しみの果てに死んでいったのとは大きな違いがそこにある。このことは、すなわちお初や小春に比べてお房の生そのものが、それ相応の重みと苦しみを受け止めて生きられなかったことの証ではないだろうか。それは、今夜限りの銀に詰まっても死ぬ以外に道がなく、その代わりに受けた苦しみが炬燵責めであったのに過ぎなかったからである。

お房もまたお辰同様に「貞女を立てるお辰様の蔑みも恥しい」と、「恥」の感覚で互いの存在を意識しているのであるが、ここでもはや、それは何らかの積極的な行為を



生み出すものではなく、所詮それは受け身の指向性しか持つてはいなかったのである。

## 五

ここで三者の葛藤を劇全体の中で位置づけ、整理しておきたい。劇そのものを支配している基本的な葛藤は、やはり徳兵衛に妻子がありながら、重井筒屋の遊女お房と深い仲になっていることにつきるであろう。つまり、この点こそがこの劇の新しい試みであったとする従来の見解は、やはり妥当であるとしなければならぬ。そしてこの時、あくまで劇の主筋が、徳兵衛とお房の恋の破綻にあったとするならば、お房の存在は二人にとって、障害として機能するはずである。そして、確かにお房にとつては命に替えても大事な銀の工面を阻止する役割を果たすのはお房である。もつとも、お辰は意識的にそうするわけではなく、それとは知らずに結果的にそうなるのではあったが。

ただこのことは、先にも述べたように、上巻の中で既に決済してしまっており、それ以降にはお辰そのものが劇に主体的な関わりを持つてはこない。もつとも、この銀の問題こそは、劇進行の上で決定的な動因となり、そのまま徳兵衛、お房の二人を死へと導くのではあるが。また、徳兵

衛も上巻で一旦はこの銀をお辰に返済し、お房とは「挨拶切る」ことをあらためて誓うのだが、これとても、そのすぐ後には生姜酒と玉子酒との逡巡のうちにはかなくも消え去ってしまった。そしてこれ以降、生姜酒に象徴されるお辰は、徳兵衛にとつて戯れ言の中にしか存在せず、まったくその影を落としてはいいと言つてよい。

また一方、お房にとつてもお辰の影は、これも「恥」の感覚においてでしかない。しかもそれさえも中巻での徳兵衛とのやりとりの中で、「思ふが不思議か女夫ぢゃもの」という徳兵衛の言葉に「ほんにさうぢゃ忝い。嬉しうござる」と、簡単に解消していつてしまうのである。そして、これ以降のお房もまた、お辰への義理立てや思いを持つことはなかつたのである。

では、妻の設定という新たな要素を持ちながらも、このことが劇そのものに十全に機能しえなかつたのは何故であろうか。一つには、互いの関係の——少なくとも徳兵衛とお辰の、そしてまたお辰とお房の——希薄さがあげられるだろう。紺屋に入婿として入った徳兵衛ではあるが、そのことは何ら徳兵衛を縛るものではなく、先述のようにお辰の母性的な慈愛のもとで、むしろそのことゆえに自由に振る舞つてさえた。こうしたお辰の愛情のあり方は、見返

り、あるいは双方向の愛を得ることはついになかったのである。放蕩息子同然の徳兵衛にとって、それは半ば鬱陶しくさえある生美酒でしかなかったのである。

また、お辰とお房との関係を考える時、本来は圧倒的な優位に立っていた苦のお辰に、その優位さがまったくと言っていいほど見られない。それどころか下巻では「我が有る故に。人二人殺すよな位牌に向うて言訳ない」という形での自己否定さえする程にある。これは『心中天の網島』において、紙屋治兵衛の本妻であるおさんが、遊女の小春に対して「女同士」という対等の地平に立とうとしたのは、大きくその次元を異にしているといわねばならない。そもそも本篇の「女同士の恥」は、受動的、消極的な感情に過ぎなかったものであり、したがってとうとう行為にまで発展することはなかったのである。

たとえば、上巻で徳兵衛が銀を返済した時にも、お辰はそのことを手放して喜ぶばかりで、その銀の使途にまで思い至ることはない。したがって、本来はこの銀をめぐってのお辰とお房との間に生じるはずの確執もまた起り得なかったのである。

お房にとってのお辰もまた徳兵衛の妻という以上の意識を喚起することはなかった。それは重井筒屋の内儀が異見

するようには、半ば一般論としての「妻子ある人」を出るものではなく、徳兵衛はついに具体的な一個の人間としてお房の前に立ち現れることはなかったのである。『心中天の網島』において、「女同士」のわずか一言から端を発し、それがおさんと小春のそれぞれの全人格を投入した義理立てへと発展し、しかも、それぞれが破綻して行ったこととの間には、やはり大きな階梯があったのである。いや、むしろ本篇のこうした「女同士の恥」が、更に突き詰められていった結果こそが、『心中天の網島』に結実していったとすべきなのであろうが。

## 六

これまで、葛藤を中心に劇の進行と展開のあり方を検証してきた。最後に本篇の詞章の上での特質をおさえておきたい。

すなわち、『重井筒』にはその方々に芝居と関わる詞章が見られることに注目し、その意味するところを考察しようとするものである。

まず、それらを列挙してみると以下のごとくである。

「顔見世」、「札」、「いろは茶屋」、「実事の格」、「せりふ」(以上上の巻)

「竹田」、「世話狂言」、「片岡」、「染川」、「飛驒椽」、  
「篠塚」、「岩井の半四郎」、「あやめぐさ」、「嵐」、「浄  
瑠璃」(以下下の巻)

このように特に下の巻の道行に頻出する。すなわちこ  
での道行は芝居尽くしといった趣向になっているのである。  
また、中の巻には見られないものの、この巻は遊女屋であ  
る重井筒屋内の場面である。つまり、芝居と遊里を「悪場  
所」とするならば、本篇はほぼその前編を通して、こうし  
た世界で展開されているということもできよう。そして、  
これらの「悪場所」は、実人生からすればあくまでもあだ  
花であり、虚構の世界なのである。ところが、本篇の登場  
人物の中ではお辰一人が実の側の世界にいたのであった。  
また、生姜酒に象徴されるお辰のもとから、玉子酒へと向  
かってしまう徳兵衛は、すなわち、実の世界を棄てて、虚  
の世界へと迷いこんでいったのである。ところが、虚の世  
界の中において、しかもそれを虚の世界のままに過ごして行  
くには、銀が必要である。虚構の世界とはまさしく、銀に  
よってこそ成り立っているのが現実だったからである。そ  
して、この世界で銀に詰まった徳兵衛には、したがっても  
はやそこでは生きられないということになる。一方、も  
とが重井筒屋の子飼の遊女であったお房は、そのような

虚の世界に否応なく身を沈めていただけに、一層よけいに  
実の世界への憧れを持っていたであろう。そして、「互に生  
まれ変つたら。本妻定めぬ其の先に早う女夫に成りませう」  
のせりふは、そのことを端的に物語っていたのである。つ  
まり、本篇における徳兵衛とお房の愛は所詮は「虚」の世  
界の中でのしか成り立たなかつたのである。

注(1) 広末 保『増補近松序説』未来社。

(2) 井口 洋『近松世話浄瑠璃』和泉書院。

(3) 重友 毅『近松世話浄瑠璃集・上』(日本古典文学大  
系) 岩波書店。作品解説。

(4) 『曾根崎心中』なども、基本的には男性の主人公の行為  
が劇を展開させていく手法であつたといえるかもしれ  
ないが、中巻以降はむしろお初に主体が移っていつた  
と見られるだろう。なお、印判盗用の趣向は、これも  
すでに『曾根崎心中』に見られ、他にも『五十年忌歌  
念仏』などにも登場する。

(5) 先掲『近松世話浄瑠璃集・上』の頭注によつた。